桂宮家の今出川屋敷における御茶屋について

—その沿革・特色・使い方と桂離宮など洛外の別荘との比較—

THE STUDY ON THE 'OCHA-YA' IN IMADEGAWA PALACE
OF KATSURANO-MIYA HOUSEHOLD

小沢朝江*

Asae OZAWA

Katsurano-miya household had three villas in Rakugai(a Kyoto suburb) except Katsura Villa, and had two palaces, called Imadegawa Palace and Ishiyakushi palace, in Rakucyu(kyoto city). This is the study on the Ocha-ya in the Imadegawa Palace. The results are as follows.

- (1) There were six Ocha-ya in Imadegawa Palace when Prince Yakahito lived in that palace. They were called Sekio, Unsetsu, Kairaku, Undai, Sakuyu and Machibito. They all had existed in 1758.
- (2) Sekio was build in 1727 at latest. This Ocha-ya was revered an anceptor, and was attached Futaba-tei tea celemony room which was the imitation of Shokin-tei tea celemony room in the Katsura Villa.
- (3) Compared with the Ocha-ya in Imadegawa Palace and those in the villas in Rakugai, they had something in common. Build on a height with a fine view, commanded a enjoyable scenery of rice field, and setting the space of revering an anceptor insaide, and so on.

Keywords: Katsura Villa, Katsurano-miya household, Ocha-ya, Sukiya, palace
桂離宮、桂宮家、御茶屋、数寄屋、本邸

はじめに

桂宮家¹⁾は、桂離宮²⁾³⁾以外に洛外に3つの別荘を所有し⁴⁾、また洛中に今出川屋敷と石薬師屋敷のふたつの屋敷を所有した⁵⁾。これらのうち、今出川屋敷は、慶長10年(1605)の屋敷替以来の屋敷⁶⁾で、当初は本邸として用いられた。しかし、元禄9年(1696)の石薬師屋敷拝領後、宝暦11年(1761)に8代公仁親王が今出川屋敷に移るまでの間、石薬師屋敷が本邸とされ、この間今出川屋敷は「上御屋敷」「上御殿」等と呼ばれて四季折々の遊興に利用された⁷⁾。すなわち、今出川屋敷は本邸としての役割のみでなく、別荘としての役割も持っていたのである。

『桂宮日記』⁸⁾(以下『日記』と略記する)などの史料によれば、今出川屋敷には複数の御茶屋⁹⁾が建てられていた。これらの御茶屋の中には、後に詳しく述べるように、桂離宮の御茶屋の写しを持つものなどがあり、洛外の別荘と密接な関係を持っていた。この今出川屋敷の御茶屋の様相を明らかにすることは、本邸に営まれた遊興の施設の様相を明確にするのみならず、桂離宮など洛外の別荘の性格や役割を明確にする上でも重要な意味を

持っている。

本研究は、桂宮家の今出川屋敷の御茶屋について、今出川屋敷が別荘として使われた江戸時代中期を中心に、桂離宮など洛外の別荘と比較しつつ、その沿革・特色・使い方等を明らかにするものである。

1. 今出川屋敷の御茶屋の沿革

1-1 初代から5代親王までの今出川屋敷の御茶屋

今出川屋敷は、慶長10年(1605)の後陽成院御所造営に先立って行われた屋敷替え以来の屋敷である⁶⁾。

『智仁親王日記』¹⁰⁾によれば、慶長10年の屋敷替え以前の桂宮家の屋敷には、慶長7年に「庭の御茶屋」が建てられ、「茶屋ニテ侍衆茶ヲノマスル」(同7・5・28)、「庭ノ茶屋ニテ乳人振舞アリ」(同7・6・23)など茶の湯や振舞に用いられている。

慶長10年の屋敷替え後、元和元年(1615)6月27日には相国寺鹿苑院の院主听叔頭岬が今出川屋敷に招かれ、「園中池亭」に赴いて茶を喫しており¹¹⁾、「池亭」があったことがわかる。庭の様子は「池水清而新竹茂、実奇観」で、庭に「弥勒石像」があり、「亭」を「作」ってこの

* 湘北短期大学生生活科学科 助手・工修

Research Assoc., Dept. of living Science, Shohoku Junior College, M. Eng.

石像を覆っていたという¹¹⁾。

『隔笈記』寛永14年(1637)10月6日条によれば、今出川屋敷において「於数寄屋、有御茶湯、御茶湯了、於御茶屋、雲門、種々珍肴、被勸杯」とあり、「数寄屋」での茶の湯の後、「御茶屋」で酒肴等が出されている。

慶安5年(1652)3月28日、今出川屋敷に後水尾法皇が御幸し、「八条殿之亭上」において「御遠見」をした¹²⁾。この「亭」は、御殿を指すとも、庭などに作られた建物を指すとも考えられる。

この今出川屋敷の建物は、万治4年(1661)に火災により焼失した¹³⁾。その後再建された屋敷の様子は、寛文13年(1673)に後西院仮御所となった際の指図¹⁴⁾によって窺うことができる。指図には、先の「弥勒石像」を納めたと考えられる「弥勒堂」が敷地の東南に描かれているものの庭や御茶屋は描かれておらず、他に史料を欠き、この時期の様相は明らかではない。この指図の御殿は、延宝3年(1663)に焼失し、その後再建が行われている¹⁵⁾。

1-2 6代から8代親王までの今出川屋敷の御茶屋

元禄9年(1696)7月6日、6代文仁親王は桂宮家を相続し、同日石薬師屋敷を拝領すると、ここに御殿を造営して同10年6月21日に移徙した¹⁾。以後宝暦11年(1761)に8代公仁親王が今出川屋敷へ移徙するまでの70年間、石薬師屋敷が本邸となり、この間今出川屋敷は「上御屋敷」「上御殿」等と呼ばれ、四季折々の遊興等に用いられた¹⁾。

元禄15年10月6日、文仁親王は今出川屋敷の「御庭南東之方」に建てられた「春和亭」に御成になった¹⁵⁾。「春和亭」という名の御茶屋は、これより早く元禄13年3月23日に石薬師屋敷に建てられていたことが確認される¹⁶⁾。石薬師屋敷の春和亭は、文仁親王の実母である敬法門院の「御有卦入」の祝いの宴のために建てられたもので¹⁷⁾、祝宴の後は「於春和亭有饗応、為牡丹花御覧也」(元禄14・3・28)¹⁵⁾など饗応に用いられているが、元禄14年4月6日に「今日春和亭二而准后様・宮様(中略)御膳被召上候」とあるのを最後に、『日記』には石薬師屋敷の春和亭に関する記事は見られないことから、春和亭が石薬師屋敷から今出川屋敷へ移築された可能性が高い。

宝永元年(1704)10月18日には、今出川屋敷の「東方御山上」の「梯雲観」という御茶屋に御成があった¹⁸⁾。この御茶屋は、「御腰掛」を「四面」に設けた作りで¹⁸⁾、眺望を楽しむための御茶屋であったことが窺われる。正徳5年(1715)10月4日の家仁親王の御成の際は、「御庭御歩行」の後、この梯雲観で管弦が行われている¹⁵⁾。

『日記』宝暦3年10月19日条に収められている享保12年(1727)12月26日付の『上屋敷附御道具并立具改帳』(以下『立具改帳』と呼ぶ)によれば、今出川屋敷付の

道具や建具として、「御茶屋立具」が挙げられている。

『立具改帳』は、今出川屋敷の「御留守居」が交代する際、今出川屋敷の什物を正確に引き継ぐため、屋敷内の建具や畳のほか、屏風や茶碗の数量まで細かに書き上げた文書で¹⁹⁾、この文書によれば享保12年当時今出川屋敷には「御茶屋畳」が12畳、「御仏壇、式間」の畳が5畳の規模を持つ「御茶屋」1棟が存在していたことになる。²⁰⁾ この「御茶屋」は、仏間を持つ御茶屋であり、「御仏壇」には位牌を祀っていた²¹⁾。後に詳しく述べるように、宝暦頃には、やはり内部に仏間を持ち、位牌を祀っている「赤黄」という御茶屋があり、年代も近いことから、赤黄と『立具改帳』の「御茶屋」は同じ御茶屋である可能性が高い。その場合、赤黄の造営年代は、享保12年以前に遡ることになる。

『立具改帳』は、享保12年のほか、宝暦3年(1753)9月28日のものも存在する²²⁾。宝暦3年の文書では、「御茶屋」と「東御茶屋」の2つの御茶屋が挙げられ、このうち「御茶屋」は享保12年の「御茶屋」と畳数や建具の記述が一致し、同じ建物を示している。残る「東御茶屋」は享保12年の文書にはまだなく、従って「東御茶屋」は享保12年以後宝暦3年までの間に建てられたものと考えられる。

『今出河花之御会』²³⁾によれば、宝暦3年3月16日に家仁親王・烏丸光胤らが今出川屋敷を訪れ、「雲雪といへる軒にいたりてはなを見」たとあり、「雲雪」という名の御茶屋が存在している。先に見たように、宝暦3年の『立具改帳』には「東御茶屋」と「御茶屋」の2棟の御茶屋が挙げられており、このいずれかが雲雪に当たることになる。このうち「御茶屋」は、先に触れたように「赤黄」と呼ばれる御茶屋であると考えられ、残る「東御茶屋」が雲雪である可能性が高い。

宝暦4年、家仁親王は7代公仁親王の結婚を機に家督を譲り、今出川屋敷に新たな御殿を建てて同年12月21日移徙し、以後宝暦11年に再び今出川屋敷が本邸となるまでの間、ここを隠居屋敷とした¹⁾。『桂宮覚書留』²⁴⁾によれば、家仁親王がこの間に屋敷の「こゝかしこにやとりをたて置」いたとあり、雲雪・偕楽・赤黄・待人・雲台・作遊の6つの御茶屋の名が挙げられている。この6つの御茶屋のうち、雲雪は先に述べた通り宝暦3年には遅くとも存在し、また偕楽は『日記』宝暦5年8月12日条に「御庭於偕楽二、賜酒肴」とあって遅くとも宝暦5年には存在しており、さらに赤黄は享保12年の『立具改帳』の「御茶屋」と同じ建物の可能性があることから享保12年には存在していたと考えられる。また『日記』によれば、宝暦7年1月に、いずれの御茶屋か不明だが「御茶屋新造」が行われている²⁵⁾。6つの御茶屋は、『今出川御茶屋和歌』²³⁾にすべてその名があり、その詠人に烏丸光胤が含まれていることから、光胤が宝暦事

件によって永蟄居に処せられる宝暦8年7月24日²⁶⁾以前にはすべて完成していたことになる。

宝暦9年に公仁親王が再婚すると、同11年今出川屋敷内に奥方御殿を新造し、家仁親王が石薬師屋敷へ移り、公仁親王と妃が今出川屋敷に移って、今出川屋敷が本邸となった⁷⁾。『桂宮覚書留』によれば、この奥方御殿の造営に際し、御殿造営に必要な敷地に建つ「やとり」を解体し、偕楽・待人・作遊の3棟を鷹峰御屋敷へ、雲台を御陵村御茶屋へそれぞれ移築した。『桂宮覚書留』には、赤黄について「此やとりハ今に有」とあり、雲台などの移築後も赤黄は今出川屋敷に残されたとされ、また『日記』に「今日当殿御花見也、赤黄御茶屋渡御」(明和6・3・10)¹⁵⁾とあって、赤黄の存在が確認できる。

1-3 8代親王没後の今出川屋敷の御茶屋

8代公仁親王が明和7年(1770)に没した後、桂宮家は跡継ぎがなく、公仁親王妃靈光院が「御家主」として当主の代わりを勤めた²⁷⁾。靈光院は、「御家主赤黄江御成、御庭桜花御覧給」(明和9・3・8)¹⁵⁾など赤黄で花見を楽しみ、また天明2年5月16日には「御家中一統在勤之面々」20名に赤黄で酒肴をふるまった。¹⁵⁾

天明8年(1788)1月30日、今出川屋敷と石薬師屋敷は共に天明の大火によって焼失した¹⁵⁾。御殿は石薬師屋敷に再建され⁷⁾、今出川屋敷には寛政3年(1791)12月2日「赤黄亭御仏間之分」が「出来」した¹⁵⁾。赤黄には、後に詳しく述べるように宮家代々の位牌が納められており、「御仏間之分」とはこの位牌を祀る部屋を指す。その後の『日記』によれば、赤黄については「常照院殿正御忌也、(中略)就同儀於今出川御屋敷赤黄亭御牌前江供朝饌」(寛政3・12・4)¹⁵⁾、「赤黄御牌前江供蓮飯」(同8・7・15)¹⁵⁾など「御牌前」を使った記事が見られるのみである。赤黄のうち「御仏間之分」のみが建てられたことを裏付けるものであろう。桂宮家は、寛政元年の靈光院没後、文化7年(1810)に第9代盛仁親王、天保4年(1833)に第10代節仁親王がそれぞれ相続したが、いずれも2歳・4歳で早世し²⁷⁾、長く当主不在の状態が続いたため、遊興目的の御茶屋は建てられなかったであろう。

弘化4年(1848)、石薬師屋敷の御殿を今出川屋敷へ移築し、常御殿等を新たに建てて、今出川屋敷に本邸の機能を移した⁷⁾。この造営後の様相を描いた今出川屋敷の指図²⁸⁾には、赤黄の「御仏間之分」に該当する建物は見られず、御茶屋と考えられる建物も描かれておらず、このときまでに失われたものと思われる。

明治16年(1883)の桂宮家断絶²⁷⁾後、今出川屋敷は上地され、御殿の一部は明治26～27年に二条城本丸へ移築された⁷⁾。

2. 今出川屋敷の6つの御茶屋の立地・使い方

以上のように、今出川屋敷には種々の御茶屋が存在したが、特に雲雪・偕楽・赤黄・待人・雲台・作遊の6つの御茶屋については、家仁親王がこれらの御茶屋を題材に『今出川御茶屋景』²³⁾『於今出川二百首和歌 式部卿宮御独吟』²³⁾などの和歌を詠み、また飛鳥井雅重を「題者」として「雲雪花」「偕楽雪」「赤黄蒙」「待人月」「雲台望」「作遊蛩」「竹裏鶯」「社頭松」の「今出川八景」が選定され²⁹⁾、この八景を題材とした和歌等も残されており、これらの和歌や漢詩、『日記』の記事等によって6つの御茶屋の様相を具体的に知ることができる。

以下、それぞれの御茶屋の立地・趣向・使い方等について、和歌などの資料をもとに検討する。

①赤黄

赤黄は、『桂宮覚書留』に「前二やま吹・紅つつし有」とあり、つつじの紅と山吹の黄に因んで付けられた名である。天明3年3月26日には靈光院が赤黄から「御庭幾里志満花」を御覧になっており¹⁵⁾、赤黄からつつじが眺められたことが確認できる。『今出川八景和歌』²³⁾には「赤黄蒙」「おなし枝を そむるなかめも うすくこく 寄やいろわく 庭のもみち葉」とあり、紅葉を楽しむ御茶屋であった。『日記』によれば、「今日当殿御花見也、赤黄御茶屋渡御」(明和6・3・10)¹⁵⁾、「今日於赤黄亭御茶屋、御家中一統(中略)賜酒肴飯等」(天明2・5・16)¹⁵⁾など、宴や花見に利用され、また「桂光院宮御影供也、赤黄御茶屋御床奉懸尊影」(明和9・4・7)¹⁵⁾など、初代智仁親王の忌日に赤黄の床に「尊影」を飾り「御影供」³⁰⁾をしている。

先に述べたように、今出川屋敷が天明の大火によって焼失した後、寛政3年12月2日に「赤黄亭御仏間之分」が「出来」し¹⁵⁾、同日桂離宮の園林堂から「代々之尊牌」を移して「安置」している³¹⁾。この「尊牌」は、「火後園林堂被納」たため、今回「迎」えに行ったとあり³¹⁾、天明の大火後一時園林堂に納めたものであって、火災以前は今出川屋敷にあったことを窺わせる。『日記』には「赤黄亭御霊前江御雑煮供之」(天明7・1・6)¹⁵⁾などとあり、天明の大火以前の赤黄亭にも「御霊前」、すなわち位牌を祀る場所があったことが確認できる。先に示したように、享保12年の『立具改帳』によれば、享保12年当時今出川屋敷には「御仏壇、式間」を持つ「御茶屋」が存在し、その「御仏壇道具」には「御位牌入箱」が含まれており、また宝暦3年に「上御屋敷守護職」が交代する際、その仕事として「御代々之御牌位御忌日朝供御料、平日朝夕供燈明」が挙げられていて³²⁾、『立具改帳』の「御茶屋」に仏間があり、その仏壇に代々の位牌を祀っていたことが判明する。仏間を持ち、位牌を祀るという「御茶屋」の特徴は、赤黄の様相とよく一致し、この『立具改帳』の「御茶屋」が赤黄と同じ建物である可能性が高い。

赤黄は、『桂宮覚書留』に「赤黄、(中略)二葉と云茶所有、是ハかつらの松琴亭のかこいをうつせり」とあり、桂離宮松琴亭の茶室の写しである二葉亭という「茶所」があった。『桂宮御飾付』³³⁾によれば、「二葉」の名は桂離宮松琴亭と今出川屋敷赤黄の両方にあることに因んだもので、二葉亭の前の踏石や手水鉢は土佐常覚(光芳)の「作」であった。土佐常覚は、宮家の御出入絵師として絵の御用を勤めたほか、家仁親王の御伽衆のひとりとして御成の御供等をしばしば勤め、また桂離宮へも享保10年に2回、同11年に1回など計6回御供している³⁴⁾。また、「土佐常覚依召参上、御茶湯御稽古有之」(宝暦12・11・26)¹⁵⁾など公仁親王の茶の湯指南も勤めており、このような立場から桂宮家の茶庭の造営に関与したのであろう。『日記』によれば、宝暦7年1月6日に「当殿御庭之内御茶屋新造」のため「方角吉方勸進」が行われ¹⁵⁾、同月26日に土佐常覚が「御庭御用」のため召されており¹⁵⁾、このとき二葉亭前の踏石等の整備が行われたと考えられ、また茶庭の整備と茶室の造営が同時に行われたとすれば、二葉亭の造営もこのときとなる。二葉亭は、「今日赤黄亭令成給、(中略)先是二葉亭数寄屋設茶湯」(天明4・4・1)¹⁵⁾、「御入来青蓮院宮・知恩院宮(中略)、於二葉亭進酒肴」(明和4・5・5)¹⁵⁾など、茶の湯や饗応に用いられている。

②雲雪

雲雪は、『今出川八景和歌』に「雲雪花」「朝夕に 君もなれミむ みよしのゝ 雲雪うつす 花のしろたへ」とあり、桜を賞でる御茶屋であった。『今出河花之御会』によれば、宝暦3年3月16日、家仁親王は烏丸光胤らと「今出川の別業の桜花さかり」を楽しむため今出川屋敷を訪れ、「雲雪といへる軒にいたりてはなを見」ている。今出川屋敷の桜は、『日記』に「一乗院宮以使被申上、今出川御屋敷花盛之躰也、(中略)今日御門前御往返之序御立寄可有之由也、(中略)及夕陽一乗院宮御入来」(享保19・3・10)¹⁵⁾とあるなど、他家から見物に立ち寄っており、『今出河花之御会』によればこの桜は「植しより八十年にあまた木たかくなりつる」とあって、80年余り前、すなわち延宝3年の火災後に植えられたものであった。『桂宮覚書留』によれば、雲雪の額は花山院常雅の筆であった。

先に述べたように、宝暦3年の『立具改帳』によれば、この当時「御茶屋」と「東御茶屋」が存在しており、また雲雪も宝暦3年にはすでに建てられていることから、『立具改帳』の2つの御茶屋のいずれかが雲雪であると考えられる。このうち「御茶屋」は、先に指摘した通り赤黄であると考えられ、残る「東御茶屋」が雲雪に当たる可能性が高い。「東御茶屋」の名は敷地の東側に位置したための呼称と推測されるが、今出川屋敷の庭の東端には築山があり³⁵⁾、この築山の裾には「龍田井」と呼

ぶ井戸があって³⁶⁾、『桂宮御飾付』に「たつたやト云茶屋有、今たつた水云井の邊楓林二有、今は桂の賞花亭是也」とあり、桂離宮の賞花亭が本来この井戸の傍にあったとされる。また「東御茶屋」は、『立具改帳』によれば、畳は5畳で、御茶屋付の道具として「のれん、とんす一、木綿一」が挙げられており、のれんを懸ける趣向に賞花亭との共通点が見られる。

③偕楽

偕楽は、『桂宮覚書留』によれば、その位置は「庭田の前、春ハ菜花」とあり、また和歌に「偕楽より田面をミテ」³⁷⁾「幾度か 風になるこもおとつれて あきの田面を宿ながら見る」³⁷⁾とあって、庭内に作られた田に面して建てられていた。『今出川八景和歌』には「偕楽雪」「ふかさもる 雪のあしたハ おもひあへす 人もとひきてともに楽しむ」とあり、雪の景色を楽しむ御茶屋であった。『日記』によれば、「各御庭於偕楽賜酒肴」(宝暦5・8・12)¹⁵⁾、「於偕楽御対面」(同5・8・17)¹⁵⁾など、饗応や対面に用いられている。『桂宮覚書留』によれば、額の字は「広橋兼胤卿筆」であった。

④雲台

雲台は、『今出河花月及紅葉の記』²³⁾に「今出川の別業にちいさき山をつくりて、いふせきやとりあり、この軒の名を雲台といふ」とあることから、庭内の築山の山上に位置し、また『今出川八景和歌』に「雲台望」「たくひなき 雲の台の軒端より はるかにむかふ四方のやまやま」とあり、『今出川御庭八景詩歌』²³⁾に「いつよりか雲のうてな軒端より むかう外山のかすむのとけさ」とあるなど、遠山等の眺望を楽しむ御茶屋であった。先に述べた通り、今出川屋敷には宝永元年当時敷地の東方の築山の山上に、四周に腰掛けを設けた「梯雲観」という御茶屋があり、眺望を楽しむ御茶屋が繰返し造られている。『桂宮覚書留』によれば、雲台の額は「雲の一字霊元院しんかんの写」であった。

⑤作遊

作遊は、『今出川八景和歌』に「作遊蛩」「つくりなす こゝも沢辺と飛はたる 軒かふ影もいとゝ涼しき」とあるなど、蛩を楽しむ場所に建てられた御茶屋であった。また、5月4日夕のあやめふきの行事の際は、「あたらしき あやめの軒に折よくも すゝしくむかふ夕月のかけ」³⁷⁾「あやめふく 宿の軒はをてらしてや 蛩飛かふ くれのすゝしさ」³⁷⁾など、作遊の軒に菖蒲を飾っている。『桂宮覚書留』によれば、作遊の額は「潤照筆」³⁸⁾で、鷹峰御屋敷に移築されたのちは「閑雲」と呼ばれた³⁹⁾。

⑥待人

待人は、『今出川八景和歌』に「待人月」「見人の心もはれて 軒のはに まち出し月の 影のさやけさ」とあり、『今出川御庭八景詩歌』に「皆人も 月まつこ

よひ 軒端哉」とあるなど、月待ちをし、月を賞でる御茶屋であった。また、「待人夜蛩」⁴⁰⁾ など蛩を題材とした歌があることから、蛩の見える場所に建てられていたと考えられる。『桂宮覚書留』によれば、額は「後西院筆写」であった。

3. 今出川屋敷の御茶屋と洛外の別荘との比較

以上、今出川屋敷の御茶屋の様相について検討した。今出川屋敷の御茶屋は現存せず、また指図等がないため平面も明らかではない。しかし、今出川屋敷の御茶屋のうち、赤黄に桂離宮松琴亭の写しが造られ、また雲台や偕楽が鷹峰御屋敷や御陵村御茶屋にそれぞれ移築されており、洛外の別荘と合わせて考察することによって、今出川屋敷の御茶屋の様相をより詳しく検討することができる。今出川屋敷と洛外の別荘は本来性格が異なるため、比較にはおのずと限界があるが、両者を比較することによってそれぞれの施設の持つ特徴を浮き彫りにすることができると思われる。

次に、今出川屋敷の御茶屋と、桂宮家が洛外に所有した桂離宮・御陵村御茶屋・鷹峰御屋敷・長岡御茶屋の4つの別荘の御茶屋について、今出川屋敷が別荘として使われた6代から8代親王の時代を中心に、御茶屋の棟数・立地・使い方・利用の実態等について比較を行う。

3-1 御茶屋の棟数と立地

桂宮家の4つの別荘は、鷹峰御屋敷を除き⁴¹⁾、すべて宮家の所領内に営まれた。敷地の広さは、『日記』明治3年4月23日条によれば桂離宮が約11,816坪、鷹峰御屋敷が約6264坪、長岡御茶屋が約4574坪（長岡天満宮境内を含む）、御陵村御茶屋が約512坪（御茶屋山を除く）であった。また今出川屋敷は、明治6年の「邸地坪数御届」⁴²⁾によれば4883坪5分4厘であった。

敷地内に建てられた建物数を、6代から8代親王時代の様相と比較すると、まず桂離宮は、現存する御殿群・園林堂・笑意軒・月波楼・賞花亭・松琴亭のほか、桂大川に近い位置に竹林亭が存在し⁴³⁾、御茶屋は5棟であった。鷹峰御屋敷は、主屋に相当する建物の存在は不明だが、宝暦11年頃には月楼・閑雲・待人・偕楽・春秋の5棟の御茶屋があった⁴⁴⁾。御陵村御茶屋は、書院と呼ばれる40坪の建物と地蔵堂があり、背後の御茶屋山の山上に雲台・邀月と呼ばれる御茶屋が設けられていた⁴⁵⁾。長岡御茶屋は、御茶屋（古今伝授の間）、台所・料理場、御客間があった⁴⁶⁾。一方、今出川屋敷は、家仁親王が隠居屋敷として用いた宝暦4年から宝暦11年の間が御茶屋の数が最も多く、遅くとも宝暦8年には先に示した赤黄・雲雪・偕楽・雲台・待人・作遊の6つの御茶屋が存在した。

それぞれの御茶屋の立地を比較すると、いくつかの共

通点を見出すことができる。

まず、池や川などの水際に御茶屋を設けている点である。桂離宮では、松琴亭や笑意軒が池に面して建てられ、舟を着けて御茶屋へ上がることができるようになっており、また桂大川に近い東外山に竹林亭が建てられていた。長岡御茶屋の場合は、敷地そのものが、天満宮境内の八条池に面していた⁴⁶⁾。鷹峰御屋敷には池はないが、敷地西辺が紙屋川に接し⁴⁴⁾『鷹峰記』²³⁾によれば「それより竹林のうちなる坂をくたり、川辺ちかくにいたる、此所は去年やすらひし所をもふける」とあって、川辺近くに御茶屋を設けていたことが窺われる。今出川屋敷では、作遊から蛩を眺め、「つくりなす こも沢辺と飛はたる」²⁹⁾などと詠んでいることから、作遊が水際に建てられていたと考えられる。

次に、敷地内の高所に御茶屋を設けている点である。桂離宮では賞花亭を築山の山上に設けており、また長岡御茶屋でも天満宮南側の山上にかつて「上之御茶屋」が設けられていたことが『長岡天満宮覚書』⁴⁷⁾から判明する⁴⁶⁾。御陵村御茶屋では、敷地背後の御茶屋山の山上に宝暦11年頃今出川屋敷から雲台を移築しており⁴⁵⁾、また雲台の移築以前にも山上に「邀月」という御茶屋があったことが確認できる⁴⁵⁾。鷹峰御屋敷の場合、敷地が上之壇と下之壇に分かれ、両者の間に約20mの高低差があり⁴⁴⁾、このうち上之壇には月楼・閑雲・待人の少なくとも3つの御茶屋があった⁴⁴⁾。一方今出川屋敷では、雲台が築山の上に位置し、この御茶屋から遠くの山々の眺望を楽しんでおり、また宝永元年当時邸内の「東方御山上」に「梯雲観」という御茶屋が存在した。

3-2 御茶屋の趣向と使い方

では、それぞれの御茶屋でどのような趣向を楽しみ、どのような使い方をしたのか、共通点を挙げてみよう。

第一に、高所から景色を遠望している点である。先に示したように、いずれの別荘にも敷地内の高所に御茶屋が設けられ、御陵村御茶屋では「直到広野御山荘、御休息於御山亭雲台、御眺望」（明和4・4・28）¹⁵⁾など雲台から眺望を楽しみ、鷹峰御屋敷では「月楼といふ茶屋にこしおろし、（中略）軒ちかくむかふたかねあをあをとしけりたるあり、あれはいつくとたつめるに、たかゝみねとこたふ、又つゝきて山あり、鷺がみねと申」⁴⁸⁾など月楼から鷹峰・鷺峰を眺めている。また桂離宮の賞花亭は、『桂別業図』⁴⁹⁾によれば、もとは現在地より東寄りの築山頂上に位置し、向きも現在とは180度逆の南向きであったことが指摘されており⁵⁰⁾、本来は敷地の外側を眺めることが意図されていたと考えられる。今出川屋敷では、雲台から「四方のやまやま」²⁹⁾を眺め、また2代親王時代の慶安5年にも「八条殿之亭上」で「御遠見」をしており¹²⁾、眺望を楽しむための建物が繰り

返し建てられている。高い場所から景色を望むための御茶屋は、遊びの場に必須の要素であったとも言える。

第二に、田面の眺めを楽しむ点である。桂離宮の笑意軒は、敷地の南端に位置し、「茶屋中ニテ宜風景にて、前ハ泉水、後ハ野辺ヲ見渡タリ、稲葉ノ緑面白シ」(延享3・9・3)⁵¹⁾、「それより笑意軒といふ所にいたる、うしろは野辺をみわたし、まへはつゝじこゝかしこに色こく咲たり」(明和4・4・15)⁵²⁾など、敷地の外に広がる稲田の様子を見ることが楽しみのひとつであった。御陵村御茶屋は、かつては敷地の周囲一面が田であった⁴⁵⁾。應峰御屋敷は「坂をのほりて閑雲といへるやとりにいたりぬ、そのふなからもひろき田面あり」⁵³⁾とあるなど庭内に「田面」が作られ、閑雲がその傍らにあった。また、今出川屋敷においても、庭内に「田面」が作られ、田に面して建てられた偕楽からその風景を楽しんだ。このように、桂離宮などのように敷地周囲に田がある場合は、その景色がよく見えるよう御茶屋を建て、今出川屋敷など周囲に田がない場合は庭内に田を作っており、田の風景を見ることが楽しみのひとつであった。

第三に、御茶屋の中に宗教的な施設を併存する点である。桂離宮では、代々の位牌を祀る場として園林堂が設けられていたが、先に述べた通り8代家仁親王時代は今出川屋敷の赤黄の仏間にこれらの位牌が祀られていたと考えられ、天明の大火後も赤黄の仏間が再建されて、園林堂に一時期納めていた位牌を再び赤黄に戻している。應峰御屋敷は、『應峰山荘に遊ぶの記』²³⁾に「座敷あなたにこなたみはつるにひとつの位牌あり、立よつてみるに敬法門院としるし侍る」とあり、いずれかの御茶屋の中に、宮家6代文仁親王の実母である²⁶⁾敬法門院の位牌を祀っており、『應峰覚』²³⁾によれば敬法門院の忌日である8月30日に留守居が花等を供えている。さらに、今出川屋敷の赤黄では、「桂光院宮御影供也、赤黄御茶屋床奉懸尊影」(明和9・4・7)¹⁵⁾など、初代親王の忌日に床に親王の「尊影」を飾り、御茶屋の床を「御影供」に用いている。また高松宮本『桂御別業記』⁵⁴⁾によれば「園林堂、(中略)又細川幽斎玄旨画像被納之、元長岡御茶屋古今御伝授之間ニテ影供有之、当時此堂ニ被納之」とあって、桂離宮園林堂に納められていた細川幽斎の画像⁵⁵⁾はかつて長岡御茶屋にあり、古今伝授の間で「影供」をしたという。ただしいずれの場合も、祀っている位牌や画像は、敬法門院が應峰御屋敷の元の持ち主であり⁴³⁾、また細川幽斎が古今伝授の間で初代親王に古今伝授を受けた人物である⁴⁶⁾など、その建物に縁の深い人物のものに限られている。また別荘全体を見ても、御陵村御茶屋に地藏堂が⁴⁵⁾、長岡御茶屋には長岡天満宮があり⁴⁶⁾、地藏堂や天満宮への参詣は御成の重要な要素のひとつであって、遊びの場に宗教的な施設が無理なく併存していたことも見過ごすことができない。

3-3 利用の実態

次に、今出川屋敷と4つの別荘への御成の様子を検討する。

今出川屋敷は、本邸であった石薬師屋敷と同じ公家町に位置した⁷⁾。例えば寛保3年の場合、『日記』によれば「午時前到有栖川宮、今出川屋敷給」(寛保3・9・23)¹⁵⁾など他の公家邸への御成の際や、「直到川崎観音等給、御帰路到今出川屋敷給」(同3・9・18)¹⁵⁾など社参の帰途に立ち寄る場合も含めて家仁親王の御成は11回に及び、後に示す洛外の別荘への御成に比べ回数が多いが、本邸に近いという点以外に、洛外への御成には必要な武家伝奏への届け出⁵⁶⁾が洛中に位置する今出川屋敷の場合は

表1 家仁親王・公仁親王の洛外の別荘への御成の回数

和 暦	西暦	御成の回数						備 考
		家仁親王			公仁親王			
		桂・御陵	鷹峰	長岡	桂・御陵	鷹峰	長岡	
正徳4	1714	1						
5	15							
享保元	16							
2	17							
3	18							
4	19							
5	1720	1		1				
6	21							
7	22							
8	23							
9	24	2						
10	25	2						
11	26	1						
12	27	1						
13	28							
14	29							
15	1730							
16	31	1						
17	32							
18	33							
19	34							
20	35							
元文元	36	1		1				
2	37	1						
3	38	2						
4	39	1						
5	1740	1						
寛保元	41	1						
2	42				1			
3	43	1			1			
延享元	44	1			1			
2	45	2			2			
3	46	1			2			
4	47	1						
寛延元	48		1		1			
2	49		2					
3	1750							
宝暦元	51							
2	52							
3	53				2			
4	54	1			1			
5	55	1			1			
6	56	1			1			
7	57	1	2		2		1°	
8	58		2		1			
9	59	1 (1)	3		1			
10	1760	1 (1)	6		2		1°	
11	61		3		2			
12	62		5					
13	63	1 (1)	4		1			
14	64		2		1			
明和元	65		2			2		
2	66							
3	67	1 (1)	2		1 (1)		1°	
4	68							
5	69				1 (1)			
6					1 (1)			
7	1770							

・長岡御茶屋への御成のうち*印は、桂離宮への御成の際に立ち寄ったもの。
 ・() 内の数字は、宿泊での御成の回数。
 ・御陵村御茶屋へは、桂離宮への御成の際に立ち寄ることがほとんどであったため、桂離宮への御成に含めている。
 ・根拠は、いずれも『日記』による。

↑<12/25 應峰御屋敷引取。
 御台所向不勝手のため5年間御成を控える。
 ↓<12/21 家仁、今出川屋敷へ移徙。
 <5/8 家仁、石薬師屋敷へ移徙。
 <4/17 家仁薨去
 <6/22 公仁薨去

必要なかった点もその理由のひとつと考えられる。

表1は、家仁親王・公仁親王等の洛外の別荘への御成の回数をまとめたものである。御陵村御茶屋へは、桂離宮とともに訪れる場合がほとんどであった⁴⁵⁾ ので、桂離宮への御成に含めている。

家仁親王は、正徳4年(1714)2月29日、12才の時に初めて桂離宮を訪れた¹⁵⁾。元文元年以降は、寛延元年から宝暦2年の5年間「御台所向御不勝手」のため御成を控えた⁵⁷⁾ のを例外とし、ほぼ毎年1～2回御成になっている。宝暦9年6月26日に初めて桂離宮に宿泊して⁵⁸⁾ 以来、桂への御成はすべて泊まりがけで行い、同年から亡くなるまでの9年間に4回と回数が減っている。一方、鷹峰御屋敷への御成は、延享3年(1746)に宮家の所有になって以来、宝暦6年までの10年間にわずか3回であったが、宝暦7年頃から多くなり、宝暦9年には3回、同10年には6回と、桂への御成が泊まりがけで行われるようになるのとほぼ同時期に急増する。長岡御茶屋への御成は、両親王を併せて5回である。

今出川屋敷・石薬師屋敷から洛外の別荘への距離は、桂離宮へは御陵村御茶屋経由で約11km、鷹峰御屋敷へは約5km、長岡御茶屋へは約17kmで、鷹峰御屋敷が最も近い。家仁親王が宝暦9年に武家伝奏に対し桂離宮への宿泊を願い出た際、その理由として「家仁四十のころかつら領分別業ゆき向、往来朝夕なれば、労つよくて行かねける(中略)、家仁五十五の暮かつらの往来猶さら老ぬるによりて(中略)、桂宿の事相談など申侍る」⁵⁹⁾ と述べているように、老年になり、遠い桂を訪れることが体力的に難しくなり、代わりに近い鷹峰御屋敷への御成が多くなったとみることができよう。

4. 今出川屋敷の御茶屋の特質

以上、今出川屋敷の御茶屋と洛外の別荘の御茶屋との比較を行った。今出川屋敷は、本邸から近いという利点を持つ反面、洛中に位置するため、地形や風景は当然別荘とは異なる。しかし、御茶屋の特徴や使い方を比較すると、洛外の別荘の御茶屋も今出川屋敷の御茶屋も、それほど大きな相違が見られない。桂離宮や鷹峰御屋敷のように敷地内に複数の御茶屋が存在する場合、ひとつは水辺に、ひとつは高所に、ひとつは田に面する位置に配置するなど、今出川屋敷と基本的な構成はほぼ同じである。これらの特徴は、御茶屋という建築に共通するものとも言え、むしろ洛中にありながら洛外の別荘と同じ趣向で楽しむ点が今出川屋敷の特徴であるといえる。

今出川屋敷の赤黄など6つの御茶屋は、遅くとも宝暦8年頃にはすべて完成したと考えられ、この頃今出川屋敷の御茶屋は最も充実した時期であった。また赤黄に桂離宮松琴亭の茶室の写しが作られた時期は宝暦7年頃と考えられるが、このように今出川屋敷の御茶屋が整備さ

れた時期は、桂離宮への御成が減り、鷹峰御屋敷への御成が増えた時期とちょうど一致する。今出川屋敷の6つの御茶屋は、高齢になり体力が衰えて、遠い桂離宮をしばしば訪れることができなくなった家仁親王が、桂離宮に行かなくとも同じ趣向が楽しめるよう整備したものと考えることができよう。

おわりに

以上、桂宮家の今出川屋敷の御茶屋について、沿革・立地・趣向・使い方等を明らかにし、桂宮家の洛外の別荘の御茶屋との比較を行った。判明した諸点は次の通りである。

- ①家仁親王が隠居屋敷として用いた宝暦4年から11年当時、今出川屋敷には6つの御茶屋が存在し、名称は赤黄・雲雪・偕楽・雲台・作遊・待人であった。このうち、赤黄は遅くとも享保12年に、雲雪は遅くとも宝暦3年に、偕楽は遅くとも宝暦5年には存在したと考えられ、宝暦8年には6つの御茶屋すべてが揃ったと考えられる。
- ②赤黄は、内部の仏間に代々の位牌を祀る御茶屋で、宝暦7年頃には桂離宮松琴亭の囲を写した「二葉亭」を増築した。二葉亭の作庭には、桂宮家の御出入絵師である土佐常覚(光芳)が関与した。
- ③今出川屋敷の御茶屋と洛外の別荘の御茶屋を比較すると、水辺に御茶屋を建てること、高所に御茶屋を作り眺めを楽しむこと、田面の眺めを楽しむこと、御茶屋内に宗教的な施設を併存すること、などの共通点が見られる。
- ④家仁親王は、桂離宮をしばしば訪れたが、宝暦9年以降御成の回数が減り、かつすべて泊まり掛けの御成となり、逆に、鷹峰御屋敷への御成の回数は同時期に急増する。また同時期に、今出川屋敷赤黄に松琴亭の囲の写しが造られ、屋敷内の6つの御茶屋が完成している。今出川屋敷の6つの御茶屋は、体力的に桂離宮への御成が難しくなった家仁親王が、洛中にいながら桂と同様の趣向が楽しめるよう整備したものと考えられる。

〔註〕

- 1) 初代から5代まで八条宮、6代から8代まで京極宮、9代から11代まで桂宮。ここでは特に必要な場合を除き、混乱を避けて桂宮とする。
- 2) 桂離宮は、江戸時代には「桂別業」(『桂宮日記』延享4年4月12日条)、「桂御殿」(『桂宮日記』正徳4年2月29日条)などと呼ばれ、明治の桂宮家断絶以後桂離宮と呼ばれた。本研究は江戸時代を主に扱うため、当時の呼称を用いることが本来ふさわしいが、煩雑を避け、一般に知られている桂離宮の呼称を用いる。
- 3) 桂離宮については多くの論考があり、ここでは本研究に特に関連の深い著書を挙げておく。森蘊『桂離宮』東都文化出版・昭和30年、久恒秀治『桂御所』新潮社・昭和37年、川上貢「桂離宮」(『原色日本の美術15 桂離宮と茶室』

- 小学館・昭和42年、所収）、内藤昌『新桂離宮論』鹿島出版会・昭和42年、斎藤英俊『名宝日本の美術22 桂離宮』小学館・昭和58年（改定版1990年）、同『桂離宮』草思社・1993年、『桂離宮御殿整備記録』宮内庁・昭和62年、西和夫『近世の数寄空間』中央公論美術出版・昭和63年、同『桂離宮物語』筑摩書房・1992年、嗣永芳照『桂別業関係年譜』宮内庁書陵部紀要第39号・昭和63年、大和智『日本名建築写真選集19 桂離宮』新潮社・1993年。
- 4) 桂宮家の洛外の御茶屋については、西和夫「古今伝授の間と八条宮開田御茶屋」建築史学第1号・1983年、西和夫・荒井（小沢）朝江「桂宮家の鷹峰御屋敷——位置と沿革そして御成の様相」日本建築学会計画系論文報告集第377号・昭和62年7月、同「桂宮家の御陵村御茶屋と地藏堂」日本建築学会計画系論文報告集第380号・昭和62年10月。
- 5) 荒井（小沢）朝江・西和夫「二条城本丸旧桂宮御殿の前身建物とその造営年代について——桂宮家石薬師屋敷寛政度造宮建物と今出川屋敷への移築」日本建築学会計画系論文報告集第387号、昭和63年5月。
- 6) 『義演准后日記』慶長10年7月7日条「内裡御屋敷北方へヒロカリ、并院御所ヲ被建、御即位ノ御支度云々（中略）、八条宮モ御屋敷替云々、是モ内裏ノ北方也」。なお、初代・2代親王時代の今出川屋敷の様相については、註3)の諸論文が既に触れている。
- 7) 註5) 荒井・西「二条城本丸旧桂宮御殿の前身建物とその造営年代について」。
- 8) 宮内庁書陵部蔵。なお、本史料については、神奈川大学西研究室所蔵の写真複写本を使用させていただいた。
- 9) 御茶屋は、庭園の中などに設けられた建物を指す場合と、別荘的な施設全体を指す場合があるが、本研究では「御陵村御茶屋」など固有名詞を除き、前者の意味で用いる。
- 10) 宮内庁書陵部蔵。註3) 久恒秀治『桂御所』による。
- 11) 『鹿苑日録』元和元年6月27日条。
- 12) 『隔簾記』慶安5年3月28日条。
- 13) 註3) 川上貢「桂離宮」。
- 14) 『延宝度後西院仮御所指図』宮内庁書陵部蔵（平井聖編『中井家文書の研究九』中央公論美術出版・昭和59年、所収）。
- 15) 『日記』同日条。
- 16) 『日記』元禄13年3月23日条によれば、この日石薬師屋敷で春和亭の御茶屋開きが行われている。
- 17) 『日記』によれば、元禄13年2月25日に文仁親王が、敬法門院の「御有卦入」の祝宴を催すため「御庭ノ内ニテ輕キ御茶屋メキタル所」を建てるよう命じている。
- 18) 『日記』宝永元年10月18日条「東方御山上設御腰掛四面、名ク梯雲観ト」。
- 19) 享保12年の場合、『日記』によれば同年12月15日に伴忠興が「今出川御屋敷御留守居」を仰せつけられ、同年12月26日に前任者から「引渡」を受けている。
- 20) 前掲『立具改帳』
御茶屋立具
一、戸数 貳拾枚 但シ御仏壇共
一、障子 大小 拾七枚
一、ふすま 大小 六枚
一、御茶屋畳 拾貳畳
一、御仏壇 貳間 五畳
一、つくえ 組立 壹
- 21) この点については第2節で詳しく述べる。
- 22) 『日記』宝暦3年9月28日条。
- 23) 宮内庁書陵部蔵。
- 24) 宮内庁書陵部蔵（註3）『桂離宮御殿整備記録』所収）。
- 25) 『日記』宝暦7年1月6日条「当殿御庭之内御茶屋新造ニ付方角吉方勧進」。
- 26) 烏丸光胤への処罰は「一家族と雖も、面会堅く停止」という厳罰であった（『京都の歴史6 伝統の定着』京都市史編纂室、昭和48年）。
- 27) 『桂宮系譜』宮内庁書陵部蔵（註3）『桂離宮御殿整備記録』所収）。
- 28) 宮内庁書陵部蔵。年紀はないが、内題に「二条離宮ニ移築其他ノ区分図」とあり、二条城への建物の移築（明治26～27年）の際の図である。
- 29) 『今出川八景和歌』宮内庁書陵部蔵。
- 30) 「影供」は、「神仏や尊い肖像などに物を供へること」（諸橋轍次『大漢和辞典』）。
- 31) 『日記』寛政3年12月2日条「今出川御屋敷赤黄亭御仏間之分今度被取建出来也、依之（中略）参向桂御茶屋、奉迎御代々之尊牌、（中略）火後園林堂被納之故也、（中略）未剋帰殿直赤黄亭安置之了」。
- 32) 『日記』宝暦3年9月22日条。
- 33) 『桂宮御飾付』宮内庁書陵部蔵。註3) 久恒秀治『桂御所』による。
- 34) 土佐常寛（光芳）の御出入の様相については、小沢朝江・西和夫「桂宮家の御出入絵師について」日本建築学会大会関東支部研究報告・1991年。
- 35) 荒井（小沢）朝江・津田良樹・西和夫「桂宮家今出川屋敷に庭について」日本建築学会大会学術講演梗概集、1989年。
- 36) 註28)『桂宮総図』。
- 37) 前掲『於今出川二百首和歌 式部卿宮御独吟』。
- 38) 潤照については明らかではないが、『日記』宝暦12年4月27日条に「於中奥御馳走、潤照席書」とあって、宝暦頃に書をもって桂宮家に出入した人物であることが知られる。
- 39) 『桂宮覚書留』「作遊、（中略）移鷹峰、今ハ閑雲ト云」。
- 40) 『今出川御茶屋景』宮内庁書陵部蔵。
- 41) 鷹峰御屋敷は、元は敬法門院（靈元天皇妃）の所有であった別荘を、門院の死後延享3年（1746）に桂宮家が引き取ったもので、禁裏御料内に位置した（註4）西・荒井「桂宮家の鷹峰御屋敷」）。
- 42) 『日記』明治6年8月29日条、所収。
- 43) 竹林亭については、註3)の各論考でその存在が指摘されている。
- 44) 註4) 西・荒井「桂宮家の鷹峰御屋敷」。
- 45) 註4) 西・荒井「桂宮家御陵村御茶屋と地藏堂」。
- 46) 註4) 西和夫「古今伝授の間と八条宮開田御茶屋」。
- 47) 長岡天満宮蔵。
- 48) 『鷹峰山荘に遊ぶの記』宮内庁書陵部蔵。
- 49) 宮内庁書陵部蔵。『桂別業図』吉川弘文館・昭和58年所収。
- 50) 『桂別業図』解題（註49）『桂別業図』別冊）。
- 51) 『家仁親王御記』宮内庁書陵部蔵（註3）『桂離宮御殿整備記録』、所収）。
- 52) 『桂別業に遊ぶの記』宮内庁書陵部蔵（註3）久恒秀治『桂御所』による）。
- 53) 『鷹峰記』宮内庁書陵部蔵。
- 54) 宮内庁書陵部蔵（翻刻嗣永芳照、「建築史学」第6号・1986年3月、所収）。
- 55) 細川幽斎の画像は、現在宮内庁蔵。
- 56) 『日記』寛保4年2月16日条「勿剋到広野御別業、（中略）遣使（中略）両伝奏、被告洛外御成」など。
- 57) 『日記』延享5年6月26日条によれば、この日「当御所御台所向御不勝手」のため5年間の儉約を決定しており、「御遊覧」もこの間止めるとしている。
- 58) 『桂別業宿日記』宮内庁書陵部蔵（註3）『桂離宮御殿整備記録』、所収）。

（1994年3月10日原稿受理、1994年7月1日採用決定）